

「胡正文学における物語」

— 中篇・短篇小説を中心に —¹

内 藤 忠 和

1. はじめに

1. 1 胡正（1924—）について²

胡正（本名胡振邦、胡令天というペンネームを用いたこともある）は、1924年山西省靈石県城内に生まれ、県の高級小学校に学ぶ。1938年9月、晋西南犠牲救国同盟会呂梁劇社に参加し、1940年冬には呂梁劇社に従って延安に入る。延安では魯迅芸術文學院そして延安部隊芸術学校で学んだ。

山西省に戻り、地方の文化工作に従事した後、1943年、延安『解放日報』（5月23日）に処女短編「碑」を発表し、創作活動を開始した。

1949年10月、軍に従って南下し、重慶『新華日報』副刊編集を担当する。

1950年12月、北京中央文学研究所で学習し、卒業後1953年夏に山西省文聯に戻る。1955年に雑誌『山西文芸』主編、1956年に山西省文聯の秘書長の職に就いた。この時期に発表した作品としては「摘南瓜」（1954年）、「两个巧媳妇」（1954年）、「七月古廟会」（1955年）などが挙げられる。1962年に代表作となる長編小説『汾水长流』を出版し、この作品は同名の映画、話劇、戯曲に改篇された。

文化大革命期間中は家族を連れて靈石県の山村に下放され、1972年に復帰を果たす。1980年以降、山西省文聯秘書長・副主席、山西省作家協会副主席・党組書記、中国作家協会第4回理事・第5回名誉委員、山西省政治協商第4・第5回委員を歴任する。1988年山西省作家協会顧問となり、1995年に引退。1998年には山西省作家協会の名誉主席となる。この時期には中篇小説「幾度元宵」（1982年）及び「重陽風雨」（1992年）短編小説「那是一只灰猫」（1997年）を発表している。

胡正は趙樹理を筆頭とする山西出身の作家から構成される文学流派＝“山薬蛋派”の一員である。中心メンバーの趙樹理、馬烽、西戎ほどの知名度は無いものの、社会主義建設期の農村を素朴なタッチで描いた「两个巧媳妇」及び「汾水长流」、文化大革命前後、激変する政治状況に翻弄されながらも愛を貫く若者を描いた「幾度元宵」など好評を博した作品が多い。作品集に『摘南瓜』（1955年山西人民出版社）、『两个巧媳妇』（1957年山西人民出版社）『七月古廟会』（1958

年山西人民出版社)『幾度元宵』(1983年人民文学出版社)がある。

1. 2 先行研究

従来、胡正をめぐる研究は、他の“山菓蛋派”の作家同様、概ね以下のよう
な二つの方向に沿って進められてきた；

① “山菓蛋派”研究の中の胡正

“山菓蛋派”がひとつの文学流派として意識され始めたのは1950年代の終わ
りのことであり³、研究対象となったのは1980年代に入ってからのものである。
1982年、戴光宗の問題提起⁴がきっかけとなって改めて“山菓蛋派”の流派と
しての独自性について検討が為され、その結果、胡正を含む“山菓蛋派”の作
品には:【山西省の農村を舞台とし、そこで発生した問題を題材としている】・【読
者である農民を意識した物語重視、叙述の優先といった民族形式を採用してい
る】といった共通点が存在する、と考えられるようになった。

しかし、この“山菓蛋派”の独自性がいつどのように獲得されたのか、という
問題についてはまだまだ検討が不十分である。

②胡正個人の文学に対する研究

一方、胡正個人の文学に関しては、1956年の「読「四年不改」和「七月古廟
会」以後」(未水『火花』1956年12月)が最初の評論であり、趙樹理、馬烽、
西戎に比べて研究の開始が比較的遅い。以後、代表作「汾水长流」を中心に、
「七月古廟会」、「幾度元宵」といった単独の作品に関する評論が多くを占める。
1980年代に入って「胡正小説創作的芸術特色」(楊占平、王秋君、王世杰、陳
玉璽、蘇春生『山西師院学報』1981年3号)、「胡正論」(楊品、王君『批評家』
1986年2月)といった胡正の文学全体を視野に入れた研究が登場し、人物造形
や心理描写の多用など、“山菓蛋派”の枠に収まらない彼独自の個性が指摘さ
れるようになった。ただし、上でも触れたような胡正の作風の変化、という視
点からの研究は未だなされていない。

1. 3 本稿の目的

ここで本稿の目的とするところについて述べたい。

前節でも触れたように、論者は従来の“山菓蛋派”、そして胡正をめぐる研
究には【“山菓蛋派”的な作風はいつどのように獲得されたのか(喪失したの
か)?】という視点が欠けていたと考える。

近年、論者は趙樹理、馬烽、西戎各作家の作品の物語構造をそれぞれ年代順に分析する作業を進め、その結果、全ての作家に（程度や時期の差こそあれ）【西洋から受容した近代文学的作風から“山薬蛋派”的作風への転換】・【“山薬蛋派”的作風から近代文学的作風への回帰】という2度の作風の転換が存在することを明らかにした⁵。

本稿では、『胡正文集』所収の中篇・短篇小説26篇⁶を対象に、語り手、叙法、順序の各視点からその物語構造を分析し、彼の文学の変遷の跡を辿る。この分析を通じて胡正文学の全貌を概観すると共に、“山薬蛋派”の作家たちが語ろうとしていた物語がどのようなものであったか、明らかにすることができると期待している。

2. 語り手

胡正の作品において物語はどのように語られているのだろうか、まずは物語世界をコントロールする存在＝語り手の問題から分析を始めたい。

今回対象とする胡正の作品26篇のうち、物語世界内部に登場して物語を語る「物語世界内の語り手」は26篇中6篇、物語世界には登場せず、外部から物語る「物語世界外の語り手」は26篇中20篇存在する。このデータを“山薬蛋派”の他の作家と比較してみると、趙樹理の作品では「物語世界外の語り手」がほぼ一貫して用いられており、馬烽の作品41篇では「物語世界内」:「物語世界外」の比率が15:26、西戎の作品45篇では「物語世界内」:「物語世界外」=11:34となっている。論者がこれまで行ってきた分析では、趙樹理の作品は一貫して「物語世界外の語り手」を採用しつつも年代と共に質的な変化【内的焦点化⇒物語言説に顕在して積極的にコントロールする】が生じており、馬烽、西戎の作品における語り手は「物語世界内」⇒「物語世界外」⇒「物語世界内」といった同じ変化のパターンを見せている。では胡正の作品における語り手はどうだろうか？

2. 1 物語世界内の語り手 「我们」・「我」

上で指摘したように、胡正の作品において「物語世界内の語り手」を用いたものは26篇中6篇存在する、そしてその在りようを徐々に変えながら、ある特定の時期に集中して登場している。

2. 1. 1 デビュー（1942年）から解放前（1949年）まで 【「我們」が他者を語る】から【「我」が「我」自身の物語を語る】へ

馬烽、西戎、胡正はほぼ同世代であり（馬烽、西戎は1922年、胡正は24年生まれ）、皆1940年前後に延安で学んだ経験を持つ。馬烽、西戎の2人は自らの軍隊経験を生かした作品「我掉了队后」（1942年）・「第一次偵察」（1942年）でデビューしており、両作品とも【「我」が「我」自身の物語を語る】タイプの語り手が採用されている。

一方、胡正の作品においても、処女作「碑」（1942年）、そして一作間に挟んで「抗日村長」（1946年）、「梨樹冤—郭媽媽訴苦記—」（1946年）と「物語世界内の語り手」が初期の作品に集中的に採用されている（別表参照）。但し、「碑」及び「抗日村長」の語り手は物語世界内部に存在するもののその姿を殆ど現さない。

自从敌人占了县城以后，刘村便变为游击区了；敌人经常来去，暗地里也有我们的组织⁷。

「碑」は、主人公である共産党幹部凌前英の勇敢な行動を全知の視点から語った短編であり、語り手が物語世界内の存在であることを示すのは上の引用部分のみである。「抗日村長」の語り手も「碑」同様、主人公である村長李連仲の活躍を全知の視点から語っており、語り手が物語世界内に存在することを証明する“我們”は物語世界において全く存在感がない。胡正は何故「我們」を登場させなくてはならなかったのだろうか？創作を始めたばかりの彼のミスと言ってしまえば簡単だが、語り手と作品世界の関係性を考えるためのきっかけとして、当時の執筆状況も考慮に入れながらももう少し分析してみたい。

胡正の回想によれば⁸、「碑」は嘗て呂梁劇社の公演山西省南部で耳にしたニュースを基に創作し、壁新聞に発表したものだという。当時、解放区では戦闘の勝利や敵の悪行などを伝える通説（ルポルタージュに近い）が大量に発表されており、「碑」や「抗日村長」の題材もこうした通説でよく取り上げられるタイプのものである。つまり、この時点では物語世界（虚構）を語る語り手というよりも、同志のニュース（現実）を伝える通信員としての意識が強かったのではないかと推測される。

實質上「物語世界内の語り手」が始めて登場するのは、1946年7月、「抗日村長」の半年後に執筆された「梨樹冤—郭媽媽訴苦記—」においてである。本作では、主人公郭媽媽が閻錫山支配下での苦難を経て共産党政権下での翻身を経験する

までを回想しており、【「我」が「我」自身の物語を語る】語り手が採用されている。

ここで注目すべきは「碑」・「抗日村長」では胡正自身が見聞した事柄を語る【語り手≒胡正】が設定されていたのに対し、この作品では主人公郭媽媽という他者を語り手として設定している点であろう。馬烽、西戎の初期作品においても類似の変化が存在しており⁹、この後、どの作家も「物語世界外の語り手」を主に採用するようになるのも興味深い。

2. 1. 2 解放後（1949年）から1950年代

【「我们」が「我们」自身の物語を語る】⇒【「我」が他者から伝聞した物語を語る】⇒【「我」が他者から伝聞した【「我」が語る物語】を語る】

「梨樹冤一郭媽媽訴苦記」の後、胡正の作品には暫く「物語世界外の語り手」が採用され、再び「物語世界内の語り手」が姿を現すのは1950年のことである。「報信」（1950年6月）・「永真回来了」（1950年11月）はいずれも重慶滞在中に書かれ、いずれも「物語世界内の語り手」が用いられているが、その在りようはやや異なる。

「報信」は、1943年の冬、山西省でゲリラ戦をしていた「我们」の部隊に日本軍が雪の中奇襲をしかけ、それに対し「我们」が間一髪で迎撃に成功するまでを描いた短篇である。この作品には【「我们」が「我们」自身の物語を語る】語り手が採用されているが、作中村人が部隊に奇襲を知らせるため山越えをするシーンなど、全知の視点も紛れ込んでおり、初期作品の通信員的な語りを連想させる。

続く「永真回来了」は、語り手「我」が王双発から聞いた【貧しさから娘永真を尼寺に出し、解放後取り戻すまでの物語】を全知の視点で語った作品である。この作品の語り手は【「我」が他者から聞いた物語を語る】タイプの語り手であり、この時期既に胡正の作品の多くを占めていた「物語世界外の語り手」への接近が見出される。

この後再び「物語世界外の語り手」による作品が9作続き、最後に「物語世界内の語り手」が登場するのは1957年に執筆された「盲女喬玉梅」においてである。

この作品では、眼科医である「我」（王医師）が以前治療した患者である喬士光に再会し、彼に請われて妹の玉梅の診察をし、治療不可能であることが分

かりながら敢えて嘘をつく、という物語の中に、喬士光が語る彼自身の来歴と妹と弟が失明し、治療を試みる物語が内包されている。この二つの物語はどちらも「我」（王医師と喬士光）が語っており、【「我」が他者から伝聞した【「我」が語る物語】を語る】タイプの語り手が採用されている。

これ以後胡正の作品に「物語世界内の語り手」が採用されることは無く、馬烽や西戎の文化大革命後の作品のように「物語世界内の語り手」の方が多くを占めるのと対照的である。

しかし、胡正の作品における「物語世界内の語り手」の変化の軌跡：【「我们」が他者の物語を語る】⇒【「我（我们）」が「我（我们）」自身の物語を語る】⇒【「我」が他者から伝聞した物語を語る】⇒【「我」が他者から伝聞した【「我」が語る物語】を語る】は、文化大革命までの馬烽、西戎のそれとよく似ている、と言う点は注意しておかなくてはならない。

2. 2 物語世界外部の語り手

胡正の作品において、物語世界の外に在って全知の視点から物語を語るタイプの語り手は、今回対象とした26編のうち20編存在する。本章の冒頭でも言及したように、趙樹理は一貫して「物語世界外の語り手」を採用しており、馬烽は41篇中26篇、西戎は45篇中34篇に「物語世界外の語り手」を用いている。戯曲や講談といった伝統的な文芸の手法を継承し、近代的個人の内面の葛藤を描くよりも農村を舞台とした物語を叙述することを主眼とした「山菓蛋派」の作品にあって「物語世界外の語り手」を選択することは寧ろ当然とも言えよう。ただ、「山菓蛋派」的な作風から考えればイレギュラーな存在とも言える「物語世界内の語り手」が実際に初期の作品を中心に多く採用され、またその在りようが年代を追って変遷していったように、「物語世界外の語り手」の在りようにも年代に沿った変化が存在している。

初めて胡正の作品に「物語世界外の語り手」が採用されたのは1943年10月『解放日報』紙上¹⁰に発表された第2作目；「民兵夏収」においてである（別表参照）。この前後に発表された「碑」・「抗日村長」は、登場人物と同じく物語世界内に存在するので「民兵夏収」と同列に論ずる訳にはいかないが、全知の視点から語っているのもまた確かである。馬烽や西戎の初期作品の語り手が「我」自身に焦点化して語ることから出発して、数年後に「物語世界外の語り手」に転換しているのに対して、胡正の作品の語り手はその出発点から全知の視点を採用

していることに注意したい。

【全知の視点で物語世界の外から語る語り手】が、胡正の作品において主流となるのは、1946年8月、「梨木冤一郭媽媽訴苦記」の直後に執筆された「捞饭盆」以後のことである。また後ほど改めて言及することになるが、この作品において初めて【物語世界外から全知の視点で語る語り手】、【叙述の優位】、【クロノスの時間順序で物語られる「問題⇒解決」の物語】といった“山薬蛋派”の特徴を全て見出すことができ、胡正は本作で“山薬蛋派”的作風を確立したと言える。

この後、1950年に執筆された「報信」、「永真回来了」には「物語世界内の語り手」が集中して登場するが、前節で分析したように、どちらも全知の視点での語り手が内包されている。とりわけ「永真回来了」で中心となる物語は「我」が全知の視点で語る【王双発夫妻が娘永真を取り戻す物語】であり、「物語世界外の語り手」による語りはかなり近いものとなっている。

以後「盲女喬玉梅」（1957年）を除き、文化大革命前後の空白を越えて90年代に至るまで、一貫して「物語世界外の語り手」を採用した作品が続く。但しこの「物語世界外の語り手」も完全に均質なままではなく、1950年代から緩やかなラインを描きつつ変貌している。

変化の兆候はまず北京中央文学研究所で学習中に執筆された短篇「除害」（1951年）から現れる。それまで描写を排し、ストイックに物語の叙述に専念していた語り手が、登場人物の心理に焦点を合わせ始め、続く「鶏鳴山」（1953年）、「摘南瓜」（1954年）、「嫩苗」（1954年）、「两个巧媳妇」（1955年）、「七月初古廟会」（1955年）においては物語の叙述の中に登場人物の内面に焦点を合わせた語りが入り込んでくる。

さらに、中国文芸界をめぐる状況が寛容を旨とする“百家争鳴・百花齐放”から肅清の嵐が吹き荒れた反右派闘争へと急転換した時期に発表された「一夜之間」（1956年）、「到女家的路上」（1956年）において、語り手はより深く登場人物の内面に入り込み、物語の叙述よりも寧ろ主人公の苦悩や葛藤を描くことに主眼を置くようになる。この時期に発表された「盲女喬玉梅」における【自己言及的な物語世界内の語り手】の採用も、こうした“山薬蛋派”的な語りからの逸脱の流れの一環であると考えれば納得がいく。

以後、現在に至るまで胡正の作品には一貫して「物語世界外の語り手」が用いられるが、それは40年代の禁欲的なまでに物語の叙述に徹する語り手とは異

なり、1950年代から登場し始めた、時に作中人物に焦点化して彼らの内面を語りもするタイプの語り手であった。

こうした1950年代後半における「物語世界外の語り手」の変質は、西戎の作品にも見出される¹¹。

2. 3 介入する語り手

ここまで胡正の作品における語り手の在りようについて、物語世界の内部／外部という枠組の中で分析してきたが、“山葉蛋派”の語り手について考える上で見過ごせない問題がもう一つ存在する。

胡正も含めて“山葉蛋派”の作家による作品は「物語世界外の語り手」を採用したものが多く。一般に「物語世界外の語り手」は、自らの物語る行為を読者に気取らせず、言わば“透明な存在”として語り、そのリアリズムを維持するものだが、趙樹理、馬烽、西戎の語り手を年代順に分析してみると、いずれも自ら物語言説の中に顕在する「介入する語り手」が次第に多く、介入の度合いを強めながら登場していることに気付く¹²。

今回対象とする胡正の作品には26篇中11篇に「介入する語り手」が登場しており（別表参照），“山葉蛋派”の他の作家に比べて登場する頻度が高い。果たして上で挙げたような変化が彼の作品の「介入する語り手」にも見出せるのだろうか、以下に分析していく。

2. 3. 1 1940年代～50年代；冒頭に「介入する語り手」

胡正の作品において初めて「介入する語り手」が登場するのは1943年に発表された彼の第二作目「民兵夏収」においてである。冒頭において民兵たちが収穫に励む姿を描いた後；

这是关庄的民兵在夏收时的情景¹³。

と語り手が姿を現してシーンの紹介をしている。

その後、1940年代の作品には「介入する語り手」は登場せず、語り手は物語世界の外から透明な存在として物語を語る。

再び語り手が物語言説の中にその姿を現すのは「報信」（1950年）においてであり、作品の冒頭でこれから語る物語の時間、舞台、内容を予告している。；

这是一九四三年冬天，我们部队在山西西北部打游击时的一件事情¹⁴。

このように胡正の早期の作品に登場する「介入する語り手」は、主に冒頭に

登場して自らが物語を語る者であることを提示するが、その後は物語に姿を見せることなく、物語世界の外部に在って語っている。

こうした物語冒頭に登場するタイプの「介入する語り手」は、数年の間隔を置いて「摘南瓜」（1954年）、「一夜之間」（1956年）にも登場するが、1950年代半ばからは違うタイプの「介入する語り手」が登場し、寧ろこちらの方がよく用いられるようになる。

2. 3. 2 1950年代～；「論評する語り手」

1950年代半ばから「介入する語り手」の在りように変化が現れる、まずは1953年に執筆され、朝鮮戦争における志願兵たちの活躍を描いた中篇「鶏鳴山」の「介入する語り手」を見てみたい；

是啊，明天就要离别了．离别，人们平常在一块儿时，一天一天地过着，不觉得什么，一旦要离别时，又觉得在一起的时间太短，心里就想起了很多好的事情．离别，激动着人们的心，离别，增进着人们的感情，离别，会使平常没有做成的事情一下子成功，何况一对情人！他们心里的话是说不完的，但时间竟过的那么快，不觉得已经半夜了，为甚么隔几年能够闰一月，今天却不能够闰一夜！（傍線は筆者）¹⁵

これは主人公王天貴が戦場に赴く前夜、恋人との別れを惜しんでいる場面に語り手が現れ、“离别（別れ）は人の心を揺り動かし、別れは人の感情を深め、別れは普段できないようなことを成し遂げさせる、まして恋人同士ならば！”と語り手自身の思いを述べている部分である。この「鶏鳴山」では、語り手が冒頭に限らず作品のあちこちに顕在して物語をコントロールするだけでなく、上の引用のように語り手自身の考えを述べたりもする。

こうした物語の各所に顕在して物語をコントロールし、また時には論評を加えもする「介入する（論評する）語り手」は「两个巧媳妇」（1955年）、「七月古庙会」（1955年）、そして文化大革命後の「幾度元宵」（1982年）にも登場している；

人们对于满心希望的东西一旦失望之后，是多么难受啊¹⁶！（「两个巧媳妇」）
农历的七月，在农村里是多么美好的季节¹⁷！（「七月古庙会」）

人在犯愁的时候，总想找亲近的人说说话、吐吐闷气、想想办法、拿拿主意的¹⁸。（「幾度元宵」）

また、先ほど言及した冒頭にのみ登場する「介入する語り手」も含めると、「鶏

鳴山」から文化大革命終了後にかけての時期の大部分の作品に「介入する語り手」が用いられている。

このように、胡正の作品における「介入する語り手」は、1950年代半ばからその使用頻度が上がり、また作品内に介入する頻度及び程度も上昇する傾向にあることが分かる。そして、こうした傾向は趙樹理、馬烽、西戎にも共通している。

2. 4 胡正の作品における語り手

以上、胡正の作品に用いられている語り手について分析してきた、ここで改めてその在りようの変化について概観してみたい；

まず、デビュー直後の胡正の作品では、物語世界内部に存在しながら全知の視点から語る【通信員のような語り手】が採用され、のち【「我」が「我」自身の物語を語る語り手】が用いられる。

1946年「捞饭盆」以後、大部分の作品が「物語世界外の語り手」によって語られるようになる（この時期登場する「物語世界内の語り手」も、【「我」が他者から伝聞した物語を語る】という「物語世界外の語り手」より近いものになる）。

1950年代に入ると「物語世界外の語り手」に変化が現れる；従来、全知の視点から物語を叙述することに専念していた語り手が、次第に登場人物の内面に視線を向けるようになり、50年代後半になると登場人物の内面に焦点を当てて語る方に重きを置きさえる。またこうした変化に呼応するように、【「我」が「我」自身の物語を語る】タイプの語り手も登場する。

その後、胡正の作品ではほぼ一貫して「物語世界外の語り手」が採用され続けた、これは文化大革命後、再び「物語世界内の語り手」が多く採用された馬烽、西戎とはやや異なり、寧ろ趙樹理の在りように近い。

また、物語言説に語り手自身が登場する「介入する語り手」は、1943年に初めて採用された後、1950年に集中して用いられる。この時点までは冒頭に僅かに姿を現すだけだったが、1953年「鶏鳴山」からその在りようを変化させ、単に物語をコントロールするだけでなく、自らの思いや意見を述べるようになる。

このような【物語世界内⇒物語世界外】・【「透明な語り手」⇒「介入する語り手」】という語り手の変遷の流れは、趙樹理、馬烽、西戎ら“山薬蛋派”の作家たちのそれと概ね合致する。

ただ、馬烽や西戎はデビュー当初【「我」が「我」自身の物語を語る】タイプから出発しているのに対し、胡正は【通信員のような語り手】から始まっている点、また馬烽、西戎は最終的に「物語世界内の語り手」に回帰しているのに対し、胡正は「物語世界外の語り手」を採用し続けている点など、彼の独自性を感じさせる部分も存在している。こうした共通点と独自性は、語り手によって語られる物語自体にも存在するのであろうか？次章以降で検討してみたい。

3. 叙述／描写

前章では胡正の作品における語り手の在りようを概観し、その変遷の軌跡に趙樹理、馬烽、西戎らのそれと良く似ている部分と胡正の独自性を主張する部分があることを指摘した。本章では、胡正の作品における語り手がどのような密度で物語を語っているのか、即ち叙法の問題について分析していく。

従来の研究で指摘されてきた、“山藥蛋派”の叙法上の特徴は；【描写を極力排し、物語の叙述を優先する】というものだった¹⁹。論者が趙樹理、馬烽、西戎の作品を分析した結果、確かにそうした“山藥蛋派”的な叙法を用いた作品が多くを占めるとは言え、皆【描写優位】⇒【叙述優位】⇒【描写優位】という【獲得⇒喪失】の過程を経ていることが分かった²⁰。こうした傾向は胡正の作品にも見出せるのだろうか？

3. 1 情景描写優位から叙述優位へ

胡正のデビュー作である「碑」、及び第2作「民兵夏収」はともに1943年に執筆されており、全知の視点による絵画的な人物描写や情景描写が多用されている；

山下面，是平躺着的晋中平川。汾河，在中间似一条受伤的长虫，蜿蜒地蠕动着²¹。

凌前英在柜后拼命的控制着两叶肺部的起合，咬紧牙，更紧地像要把那破缸片捏裂似的用双手举起来，眈眈的眼睛，发出坚定不移的光彩，盯着前面一那将要到来的命运的斗争²²。（以上「碑」）

地畔上放着他们的一些被子、行李和一支快枪、一支土枪，两颗手榴弹人似的立着，一根长矛子，直竖竖地插着²³。

每个人都戴着一顶草帽，就像五只小帆船在金黄色的海洋里驶去一样²⁴。
树林里静悄悄的，夏夜的微风，轻轻地吹舞着树叶，清爽的天空里，一轮

明月渐渐地从东方移向当空，月光穿过树叶隙缝，洒在甜睡着的民兵们身上，忙累了一天之后，他们睡得多么舒服啊！²⁵

微风飕飕地吹着，汾河慢慢地流着，两岸树林严森森的，村子黑糊糊的，一片片的麦子絮絮微响²⁶。

远处鸡啼了，夜色渐淡，一切景色渐渐地显现，东方一阵一阵亮过来²⁷。

太阳掀起乳白色的朝雾，升起来了，汾水披着一层霞光，泛泛耀眼²⁸。

（以上「民兵夏收」）

いずれも情景や人物の行動を生き生きと色彩感覚豊かに描いており、この時期の作品の雰囲気は素朴と評される“山薬蛋派”的な作風とはかなり隔たりがあった。

1946年になって発表された「抗日村長」にもこうした情景描写は登場するが、その頻度は少なくなり、作品の末尾に一度用いられるのみである；

太阳随着血红的的光芒升起来了。多么耀眼啊！她照耀着正在拆毁碉堡的战士和群众，她照耀着解放了的仁岩镇²⁹。

同年続いて発表された「梨樹冤一郭媽媽訴苦記一」には描写が全く存在しなくなり、以後1950年代初めまでは「捞饭盆」（人物描写1）、「長煙袋」（叙述中心）、「六顆熟鷄蛋」（心理描写2）、「報信」（叙述中心）と叙述中心の作品が続く（別表参照）。

この40年代中葉における【描写使用】から【叙述優位】への転換、即ち“山薬蛋派”の作風の獲得は、同年代の馬烽、西戎にも共通して見出せる現象である。

3. 2 叙述優位から描写優位へ

語り手が再び物語世界を彩り始めるのは、1950年に執筆した「永真回来了」以降のことである。この作品では語り手「我」の視線を通じて主人公永真の姿や情景が詳細にまた時に生き生きと描かれる；

在会场里，我看见这样一个娃儿—白净的脸孔，耳朵上扎着耳环眼，不是男娃；剃光的脑壳，又不像女娃。她穿着一件齐膝盖的淡灰色衣衫，不是长袍，也不是短褂，虽然破旧，却很干净。衣衫没有领子，二寸宽的白色斜襟上，有几个细布条，算作钮扣³⁰。

一出庙门，永真就像出笼的小鸟一样，跳着，不回头看一下。也不顾路上的石块、泥巴，只觉得路是平坦宽。天空晴朗朗的，太阳照得她身上发暖，画眉鸟从竹林里飞出，小兔在草坡里奔跑，虎溪河上一群群鸭子游水，黄桷树梢上

黄莺高叫³¹。

続いて同年書かれた「武子発与呉農蔭」では再び描写が減り叙述が主となるが、翌年北京に異動後始めて発表された「除害」からは、語り手の眼差しは登場人物の外見や情景ではなく、登場人物の内面により多く注がれるようになる。

今天田保春走着走着，忽然想起这些事来，就觉得村主任的话应当注意了。“自己事后为什么没有找他谈话呢？没有关照他的困难，单是批评，没有从团结中教育他。……”可是，又想到，“他这人并不是个坏人，该不会跟我记这么大的仇，不会下这毒手害死我的牛吧？可是，药铺的掌柜子说，大胡子，月牙疤。……”³²

李旺身坐在炕上，眼睛瞪着屋梁，右手摸着络腮胡，心想：“田保春为什么要害我呢？”土地改革前，他和田保春是闹过一架，还打了官司，可是，那事情土地改革时就了结了，两个人当面讲了和。莫非田保春一直没有忘记吗？³³
この作品は、主人公田保春の牛を薬殺した犯人は誰なのか、謎解きの物語が中心に据えられており、主に前半において主人公田保春と、牛殺しの濡れ衣を着せられた李旺身の双方が疑心暗鬼に陥る心理が描かれる。

こうした【登場人物の心理描写を交えつつ物語を語る】スタイルは、以後「鶏鳴山」（1953年）、「摘南瓜」（1954年）、「嫩苗」（1954年）、「两个巧媳妇」（1955年）、「七月古庙会」（1955年）と50年代中盤の作品まで一貫して用いられる。

こうした流れに変化が起こるのは、前章でも触れたように“双百”⇒反右派闘争と連なる政治的混乱期に発表された「一夜之間」（1956年）、「到女家去的路上」（1956年）においてである。「一夜之間」では；従来の方法にしがみつくあまり、加速する農業集団化の流れに乗り遅れてしまった省委書記葛運昌が、自身の過ちに気付き、初心に戻って任務に取り組むまでの過程が描かれ、「到女家去的路上」においては；農業集団化が進み、娘を嫁がせた金で手に入れたロバを供出することに納得がいかない農婦郝金娥がロバを連れ出して娘の家に向かう途中、自問自答の末、自らの考えを改めてロバを供出する決心をするまでが語られる。どちらも主人公の内面における変化が作品のテーマとなっており、かなり長い心理描写が幾度も挿入されている。以下はそれぞれ主人公がクライマックスで自らの考えを改める部分である；

但是，当高级社的问题摆到自己面前时，自己又恢复了原来的思想状况。难道这正像王佑明批评自己的那样：由于自己看不见群众的社会主义觉悟，因而自己的领导思想和工作方法也落到形势和群众后面了？这时，他已经完全打消

了明天再去和王佑明辩论的想法.他忽然痛苦地想着:难道真的是自己错了吗?想到这里,他不禁吃惊地吸了一口气,・・・³⁴ (「一夜之間」)

老人家的那句问话难住她了。“到女家做甚?”那么自己给她们讲的那些话是假的吗?不,自己的灰驴和别人的不一样吗?是啊,这是心病.可是这心病怎么来的?为什么要把女儿卖的远远的,买来头灰驴呢?因为家穷,因为没有牲口不能养种庄稼,过不好生活.那么现在办农业社、转高级社又是为了甚呢?

想到这里,她浑身软了.

如果闰女家村里也转高级社,闰女家也加入了高级社,闰女和村里人们也来问自己村里转高级社的情形时,怎么说呢?像刚才那样说了,再把毛驴留下?能这样吗?闰女留不留呢?自家村里的妇女们呢,不也是和刚才路过的那村的妇女们一样,正在积肥吗?她又想起昨天晚上妇女们还互相挑战,要用积肥来迎接高级社.那么她们今天问起来,郭家润的老伴,不,她们会问郝金娥做甚么去了?自己该怎么回答?难道把毛驴送走是迎接高级社吗?

忽然间,她的脸热了,心里难过了一阵.她想:现在不是到女家去的时候.好吧,牲口作价归社后,把一半款子投资到社里,一半款子给闰女、外孙们买几身衣衫,过年时再去看望闰女吧.³⁵ (「到女家去的路上」)

このように、“双百”から反右派闘争に至る時期の2作品においては、語り手の関心は物語の叙述よりもむしろ主人公の心理を描く事に向いている。

こうした【物語叙述よりも登場人物の心理描写に重きを置く】スタイルは、趙樹理、馬烽の晩期の作品、そして西戎の58年前後の作品においても見出されるが³⁶、胡正の作品においてはこうした変化の起こりが早く、また心理描写を用いる作品の割合もずば抜けて高い。これ以後、胡正の作品では、ほぼ一貫して【描写を交えつつ物語を語る】スタイルが採用され続けている。

以上、胡正の作品における叙法の問題について分析を加えてきた、ここで一度まとめておきたい;

まず、デビュー当初においては【人物・情景描写を作中に交え物語を語る】叙法が採用され、40年代半ばから“山薬蛋派”的な【描写を排し物語の叙述に専念する】スタイルに変化する。

1950年代初めになって早くも作中に描写が復活し、とりわけ「除害」からは【登場人物の心理描写を交えつつ物語を語る】スタイルが一貫して採用されるようになる。

1956年に発表された「一夜之間」,「到女家去的路上」では、作中に頻繁に登

場人物の心理描写が挿入され、一時的にせよ、“山藁蛋派”的な叙法を大きく逸脱した【物語叙述よりも登場人物の心理描写に重きを置く】スタイルが用いられた。

以後、近年に至るまでの胡正の作品では、一貫して【描写を交えつつ物語を語る】叙法が採用され続けた。

このように、胡正の創作歴全体を概観してみると、“山藁蛋派”的な描写を排したスタイルが採用されていた時期はごく僅かであり、むしろ【描写を交えつつ物語を語る】叙法を用いていた期間の方が長い。とりわけ心理描写の多用は他の“山藁蛋派”の作家に見られない胡正の独自性と言ってよい³⁷。

但し、本章の冒頭でも触れたように、趙樹理、馬烽、西戎の3者に共通して存在する【描写優位】⇒【叙述優位】⇒【描写優位】という“山藁蛋派”的叙法の【獲得⇒喪失】という変化の流れは、胡正にも確かに存在する。

4. 順序

ここまで胡正の作品において語り手がどのような位置と視点から（第2章）、どのような密度で（第3章）物語を語っているのか分析してきた。本章では、語り手がどのような物語をどのように組み立てて語っているのか、物語とその「順序」の問題について見ていきたい。

こうした問題について、従来の研究で“山藁蛋派”の特徴として挙げられてきたのは；[問題⇒解決]構造を持つ首尾一貫した物語が農村読者に配慮したクロノス的な時間順序で物語られている、というものだった³⁸。事実、趙樹理の作品の大部分はこうした特徴を有している。

論者が趙樹理、馬烽、西戎の作品を分析した結果では；確かに趙樹理の作品の大部分は[問題⇒解決]構造を有し、殆どの物語がクロノス的な時間構造によって物語られているものの、初期におけるそうした“山藁蛋派”的特徴の獲得と晩期における変質及び喪失という変遷の過程が存在する³⁹。また、馬烽、西戎の作品においても、時期の前後はあるものの、“山藁蛋派”的特徴の獲得⇒共有⇒喪失 という同様のプロセスが存在している⁴⁰。

胡正の場合はどうだろう？

4. 1 40年代：[問題⇒解決]構造の獲得

まずは胡正のデビュー作「碑」（1942年）の物語構造を見てみよう；

- ①1940年の秋、区幹部凌前英が劉村近辺の婦人救国会にやってきた。
- ②早朝、婦人救国会秘書の家で集会が始まるが、そこへ家の息子が駆け込んできて、日本軍の襲来を告げる。そこで皆は逃げ出し山や作物に身を隠す。前英は足の不自由な老婆をかばって一緒に逃げる。
- ③そこへ田中隊長に率いられた小隊がやってくる。前英は老婆を草小屋に押し込み、みずからは収穫した高粱の中に隠れて敵をやり過ごす。村の外に逃げようとするが方向を間違え、汾河の方角に来てしまう。銃声が聞こえたので慌ててある家の中に身を隠した。
- ④日本の小隊は村を包囲し終え、捜索を続けていた。副隊長は高粱の山から何者かが逃げ出した跡を追い、前英が隠れている家に近づく。前英は物陰に身を隠して敵を待ち構え、全身の力をこめて水瓶を頭に叩きつけて昏倒させ、銃を奪って敵を射殺する。しかし銃声を聞きつけた敵兵に追いつめられ、前英は河に身を投げた。
- ⑤二ヵ月後の冬、前英の功績を偲び、彼女が身を投げたところに呂梁の青石を使った石碑が建てられた。

このように女性幹部の勇敢な戦い的一幕を描いており、その時間順序は物語世界内の時間と一致している。しかし、“山薬蛋派”の特徴を支える[問題⇒解決]構造はまだ存在しておらず、物語を彩る絵画的な描写も相俟って後年の作品とはかなり趣を異にしている。翌年発表された第2作「民兵夏収」も同様であり、“山薬蛋派”的な作風を見出すことはできない。

続く1946年に執筆した「抗日村長」も、冒頭において主人公李連仲の回想が挿入され、時間構造に僅かな変化が認められるものの、まだ農村に存在する問題を発掘してはおらず、前作の雰囲気を残したものとなっている。しかし、同年発表された「梨樹冤—郭媽媽訴苦記—」においては、語り手「我」が回想するスタイルではあるが直線的な時間構造が存在し、また「我」が閻錫山支配下で受けた苦難を共産党政権が救った、という[問題⇒解決]構造が登場し始める。

そして胡正の作品の中で始めて“山薬蛋派”的作風が確立された、と言い得るのは「梨樹冤—郭媽媽訴苦記—」の直後に執筆された短篇「撈飯盆」においてである、以下にその物語構造を示す；

- ①河底村の前には大きな川が横たわり、毎年夏・秋に山から大水が流れて水流が変わるため、兩岸には広い河川敷が広がっていた。村には家も農地も持たない貧しい王喜根という男がおり、河川敷を開墾して農地を手に入れ

ようと考えた。[設定]

②王は仕事の合間に苦勞して妻と石を積んで河川敷に堤防を作り、中に大水が運んできた良い土を溜めた。翌年の春、彼は作物を植え、それは見事な実りをもたらし夫婦2人は飯の種ができた喜び収穫に励む。

③収穫した作物を脱穀し、家に運ぼうかと言うとき、地主李呈祥がやってきて土地契約書を口実に年貢を出せと言いつくす。喜根は認めず物別れに終わるが、李は区長に手紙を書き、区長は王を役場に連行して一方的に彼の言い分を却下し、土地は李のものになってしまう。王は身を裂かれるような思いで年貢を払った。[問題]

④再び秋の収穫の季節がやってきた。皆は共産党の指導の下、自ら村長を選び年貢軽減を口にするまでになっていた。河底村では農民大会が開かれ、王喜根は李に土地を返すよう詰め寄る。李はあれこれ言い逃れしようとするが、逆に喜根にやり込められ、とうとう土地を返すことに同意する。[解決]
土地契約書を手に家に帰る途中、河川敷の土地にさしかかり、王喜根は喜んで飯の種が帰ってきた、と笑う。

このように、冒頭において何時・何処で・誰が、という物語の基本情報が提示され(①)、土地を地主に強引に奪われる(③)という[問題]を共産党の指導の下、地主との闘争を経て土地を取り戻して[解決]する(④)という物語構造になっており、“山菓蛋派”の特徴とされる【[問題⇒解決]構造を持つ首尾一貫した物語が農村読者に配慮したクロノス的な時間順序で物語られる】スタイルを完全に備えている。

続く「長煙袋」(1947年)にはこうした構造が存在するものの、続く「六顆熟鶏蛋」(1947年)には[問題⇒解決]構造を見出すことはできず、この時期に“山菓蛋派”的作風が完全に定着したとは言えない。

こうした“山菓蛋派”的物語構造獲得の背景を考えるため、ここで胡正自身の発言を引用したい；

到静乐县娄烦区后，才开始遵守《讲话》精神深入群众生活。在第一次和农民共同生活的一年中，由于和他们命运相连、亲切相处，一方面深入了解他们的生活和思想感情，同时注意他们喜欢的文艺表现形式，开始学习他们生动的语言，记录了一些他们唱的民歌，写出了几篇小说和诗歌。在《讲话》精神的指引下，开始走上了文学创作的⁴¹道路。

このように、胡正は1943年に毛沢東の「文芸講話」の影響を受け、初めて農

村に入って農民が好む文芸形式に注意し、彼らの言葉を学んだ、と回想している。この時の経験を生かして「民兵夏収」が書かれているのだが、本節で既に分析したように「民兵夏収」ではまだ“山薬蛋派”的物語構造は確立されていない。新しい形式を消化するまでに時間が掛かった、という考え方も出来るが、“山薬蛋派”の作家たちが“山薬蛋派”的物語構造を獲得しようとする時期には、農村での実務経験以外に、いずれも新聞社において娯楽性の強い副刊の編集を担当するという経験を共有している。従って胡正が“山薬蛋派”的物語構造を獲得するには、モデルとしての趙樹理の作品の受容や、1946年からの『晋綏日報』での経験も必要だったのではないかと推論したい。

4. 2 50年代：錯綜し始める時間

1940年代の作品は、[問題⇒解決]構造の有無は別として、基本的にクロノス的な時間構造で語られ続けていた。しかし、1950年代、山西の地を離れ重慶に移った胡正が発表した2篇の短篇において、語り手は過去の物語を回想し、時間構造が歪曲し始める。

「報信」(1950年)は、語り手「我们」が1943年当時の事柄を回想する物語である；

- ①1943年冬、「我々」の部隊は山西西北部でゲリラ戦をしており、敵を襲っては包囲を避けて村を転々としていた。年末、敵拠点から比較的遠い村で休暇を取っていたが、2日も経たないうちに敵に知られてしまい、敵は雪の中を白装束の騎馬隊で急襲する作戦を取る。
- ②夜中、息子の病気を診てもらおうと薬屋の門を叩いていた老人を斬り殺し、敵は拠点を出発した。見張りの目を逃れ、敵は部隊に迫ろうとしていた。
- ③敵が出発前に老人を斬殺した時、向かいの中年の農民がその様子を目撃しており、慌てて八路军に知らせに行こうと山道を急ぐ。石に躓いて転んだ時、一息ついて怪我を調べながら八路军がこの夏彼の怪我を治してくれたときのことを思い出した；
- ④当時、敵は人々を拷問して食料の供出を強制していた。八路军は敵を撃退して彼の怪我を治し、彼の代わりに麦の収穫までやってくれた。しかし幾日も経たないうちに鎮は敵に奪還され、麦も徴発されてしまった。
- ⑤再び先を急ぎ、やっとたどり着いて情報を伝えると、部隊の人々は直ぐ彼を介抱し、部隊長はすぐ迎撃の準備を整え、敵を撃退する。勝利を喜

ぶ人々を太陽が照らした。

このように、語り手「我們」が回想する物語の中にさらに農民の回想が内包される構造となっており、40年代半ばに獲得された[問題⇒解決]構造も存在しない。同年発表された「永真回来了」も、冒頭の語り手「我」が永真と王双発に出会う場面が物語世界内の時間順序では最後のシーンであり、そこから時間を遡って【王双発が貧しさから娘永真を尼寺に出し、解放後取り戻すまでの物語】が改めて語られる時間構造となっている。続く「武子発与呉農蔭」では、物語の前半と後半に登場人物の来歴を紹介する部分が挿入されるものの、基本的にはクロノスの時間構造に近く、[問題⇒解決]構造も存在するなど、“山薬蛋派”的作風に近づく。

この後、胡正は1950年12月から北京中央文学研究所に在籍し、『水滸伝』をはじめとする古典小説やプーシキンなどの外国文学に触れる機会を得た⁴²。この時期に執筆された「除害」（1951年）は、直線的に展開するストーリーの随所に語り手による過去への回帰や登場人物による回想が挿入される、というやや複雑な時間構造を有している上、【主人公田保春の牛を薬殺した犯人探し】という謎解きの物語に【田保春与李旺身の関係改善】の物語が絡みあっており、言わば2重の[問題⇒解決]構造が存在している、と言える。

続いて朝鮮戦争の従軍体験に基づいて書かれた胡正初めての中篇小説「鶏鳴山」（1953年）の時間構造は、前半に登場人物の回想や人物の来歴が頻繁に挿入されるものの、後半は直線的にストーリーが展開しており、やや“山薬蛋派”的な時間構造に近づく。但し、語られる物語から[問題⇒解決]構造を見出すことは難しい。このように、50年代初頭の作品群からは“山薬蛋派”的な物語構造はあまり見出せない。

1953年夏、北京中央文学研究所を卒業した胡正は、山西省に戻って雑誌編集などの文芸関係の仕事に従事した。この時期発表された作品群「摘南瓜」（1954年）、「嫩苗」（1954年）、「两个巧媳妇」（1955年）、「七月古庙会」（1955年）からは“山薬蛋派”的な物語構造が安定して見出せるようになり、胡正の代表作と評されるものもこの時期のものが多い。

しかし第2章、第3章でも触れたように、“双百”⇒反右派闘争へと至る時期になると、当時の政治的混乱を反映するかのごとく“山薬蛋派”的時間構造・物語構造を持たない作品が続く；

「一夜之間」（1956年）は、“県書記葛運昌の遅れた思想”という[問題]が“葛

自身の自己批判”という[解決]に至るまでに、幾度も過去の回想が挿入される時間構造になっており、続く「到女家去的路上」（1956年）では、前半に“娘と引き換えにロバを購入した過去”などが挿入され、後半は直線的に“農婦郝金娥がロバを供出する決心をする”という結末まで進むという時間構造が見出される。この2作で注目すべきは、解決されるべき問題が登場人物自身の思想や感情である、という点であろう。基本的に“山菜蛋派”の作品における[問題]は比較的明快な[善と悪の闘争]を通じて[解決]に至ることが多いのだが、この2作においては[心中の葛藤]を経て[解決]に至るという[問題⇒解決]構造の変質が見出される。

続く「盲女喬玉梅」（1957年）は；眼科医「我」（王医師）が嘗ての患者である喬士光に請われて妹の玉梅を診察し、治療不可能であることが分かりながら敢えて嘘をつく、という【回想の物語】の中に、「我」（喬士光）の従軍中に迫害を受けた妹と弟が失明し、解放後必死に治療を試みる、という【回想する物語】が内包される、という入れ子状の時間構造になっている。また、当時の医療技術では治療不可能な“喬玉梅の眼病”という[解決不可能な問題]の設定も加わり、胡正の作品の中では最も“山菜蛋派”らしからぬ作品となっている。

1958年、反右派闘争の余波が続く時期に書かれた「拉驢記」、「余牛子売余糧」には再び直線的な時間構造と[問題⇒解決]構造が戻ってくる。

4. 3 文化大革命後：錯綜する時間構造と[問題⇒解決]構造の変質

文化大革命終結後、胡正は1979年から小説の創作を再開する。再開後第一作となる短篇「奇婚記」は、文化大革命期の人民公社書記によって無理やり離婚させられた夫婦（[問題]）が公社書記の失脚後もとの鞘に収まる（[解決]）までを描いた短篇である。前半に[問題]の由来：過去の公社書記とのトラブル]が説明され、終盤公社書記の批判大会に駆けつけた妻の[離婚させられたその後]が明かされるなど、直線的な時間構造は存在しないが、[問題⇒解決]構造を見出すことはできる。

続く中篇「幾度元宵」は、上篇（1981年）・下篇（1982年）に分けて発表され、上下とも複雑に入り組んだ時間構造を持つ作品となっている。

上篇の物語は；1975年の元宵節前後の数日間、無理やり引き裂かれようとしていた恋人同士（薛安明と沈翠葉）が障害を乗り越え、また周囲の助力も得て結婚に踏み切るまでのストーリーを軸として、中間に二人の恋の芽生え（1965

年)、薛安明の投獄(1966年)、二人の庇護者苗主任と翠葉の母の悲恋(1936年)といった過去の元宵節に繰り返されたストーリーが幾度も挿入されている。

下篇では:1979年の元宵節前後の数日間に、薛安明・沈翠葉夫妻が奪われた研究成果を取り戻し、名誉回復を果たすまでの物語が主軸となり、中間に、敵役 楊申全による研究成果の強奪及び反撃(1975~76年)といった過去のストーリーが挿入される。

こうした時間構造からは、農民を読者として想定し、分かり易い直線的な時間構造で物語を語る“山菓蛋派”的な作風を見出すことは難しい。しかし、複雑に絡み合った複数のストーリーの中から読者が読み取るのは、趙樹理の代表作「小二黒結婚」(1943年)のそれにも似た【恋の芽生え⇒障害⇒党幹部の助力による解決】と言う 素朴な物語構造である。

この後、胡正の眼差しは過去、それも自身の文学の出発点となる1940年代に向けられるようになる。「遭遇」(1987年)は、戦場で出会った若い男女が、敵の包囲網を抜け、洞窟で一夜を明かす間に感情を通い合わせ、恋に落ちるまでを描いた短篇である。この作品では冒頭から戦闘シーンが描かれ、これが何時のことで登場人物がどんな人間なのか、全く説明がない。読者は作品を読み進めるうちにこれが1940年、日本との戦争中の物語であり、二人は宣伝課の職員と劇団の女優であることも分かってくる。こうした[冒頭における設定]の消失を初め、頻繁に挿入される過去の回想など、“山菓蛋派”的な時間構造は完全に失われている。また数十年前の出来事を懐かしむ語り手からは、農村に存在する[問題]を発掘する姿勢を見出すことはできない。

1992年に発表された中篇「重陽風雨」も、前作同様1940年代を舞台とした若い男女の恋愛をめぐる紆余曲折を描いた物語である。1948年に解放区を追われたヒロイン何舒莹が、恋人沈紀明との再会と離別、太原解放の混乱などの苦難を経て、紀明との恋の成就を目指して彼のもとを訪れるまでのストーリーを軸に、途中紀明との恋の馴れ初めや舒莹が解放区を追われた理由といった過去のストーリーが頻繁に挿入され、錯綜した時間構造となっている。また作中に登場するプーシキンの『ドゥブローフスキィ』⁴³が二人の恋の行方を暗示するように作用するなど、重層的な物語構造が存在する。

1995年の引退後、97年に発表された短篇「那是一只灰猫」は、初めて衛生検査団の一員となった白寄舟の眼差しを通じて、衛生行政の形式主義、理想と現実のギャップなどの矛盾を鋭く抉り出した作品となっている。ここからはリア

リズムによって切り取られた日常の矛盾を見出すことはできても、嘗ての素朴な物語の痕跡を見出すことは難しい。

このように、文化大革命後の作品群からは、60年近いキャリアを持つ作家胡正のオリジナリティや成熟を読み取ることはできるのだが、逆に“山薬蛋派”的作風の喪失も一層強く感じられてしまう。

5. 結論

以上、胡正の作品に対し、語り手、叙法、順序の各視点から分析を加えてきた。最後にこれまでの分析に基づいて、胡正の文学の変遷の跡を辿ってみたい；

1942年、馬烽、西戎と同時期にデビューした胡正の初期作品は、【物語世界内の語り手】、【描写優位】、【[問題⇒解決]構造の欠落】という“山薬蛋派”的作風とはかなり異なる特徴を持っていた。40年代半ばに【「物語世界内の語り手」から全知の「物語世界外の語り手」への転換】、【描写優位から叙述優位への転換】、【[問題⇒解決]主題を有するクロノスの時間構造の成立】といった“山薬蛋派”的作風が獲得されるが必ずしも定着せず、1950年代半ばの作品群において漸く“山薬蛋派”的と評しうるものが連続して登場するようになる。

50年代後半の作品においては【「我」が「我」自身の物語を語る「物語世界内の語り手」の登場】、【心理描写の多用】、【錯綜する時間構造】など、“山薬蛋派”的作風からの逸脱が見出されるようになり、文化大革命後、発表された作品からはもはや“山薬蛋派”的な素朴な作風を見出すことは難しく、読者は作家胡正の成熟した姿を目にするようになる。

こうした中国近代文学の影響下からの出発⇒“山薬蛋派”的作風の獲得⇒中国近代文学への回帰、という変遷の軌跡は趙樹理、馬烽、西戎においても見出すことが出来る⁴⁴、つまり、同一、あるいは類似の構造を有する物語を複数の作家が世に送り出していた時代が存在していたことになるわけだが、それは作家たちの意図的な戦略によるものなのか、時代の要請によるものなのか、また当時の読者に何をもたらしただのか、論者の手元にはまだ明快な解を出す材料が揃っていない。こうした課題については、“山薬蛋派”の同世代作家である孫謙、東為の分析を経た後、改めて考察することとしたい。

注

- 1 本稿において使用する中国語の簡体字・繁体字は、引用部分を除いて“山药蛋派”⇒“山
菓蛋派”というように、出来る限り日本語の新字体で表記することとする。
- 2 『中国作家大辞典』（中国文連出版社1999年）、「胡正論」（楊品，王君『批評家』1986年2
月）、「作家簡曆」（『胡正文集』（以下『文集』）山西人民出版社 2001年）を参考にした。
- 3 『多維整合与雅俗同構』（席揚 中国社会科学出版社 2004年）
- 4 「“山菓蛋派” 質疑」（戴光宗『山西文学』1982年8期）
- 5 拙稿「趙樹理文学における故事性」（『島大言語文化』13号2002年）、「趙樹理文学の変容」
（『島大言語文化』15号2003年）、「馬烽文学における語り」（『島大言語文化』20号2006年）
、「西戎文学における物語構造」（『島大言語文化』24号2008年）を参照されたい。
- 6 趙樹理，馬烽，西戎との比較が難しいため（彼らの作品は80年代まで）、本稿では最新作
「明天清明」（2000年）を対象外とした。
- 7 『文集』 3 卷p1045
- 8 「昨天的足跡」（1991年10月『五人集』所載）
- 9 拙稿「馬烽文学における語り」（『島大言語文化』20号2006年）、「西戎文学における物語構造」
（『島大言語文化』24号2008年）を参照されたい。
- 10 1943年10月14日
- 11 拙稿「西戎文学における物語構造」（『島大言語文化』24号2008年）を参照されたい。
- 12 注5に同じ。
- 13 『文集』 3 卷p1053
- 14 『文集』 3 卷p1100
- 15 『文集』 2 卷p559
- 16 『文集』 3 卷p1166
- 17 『文集』 3 卷p1185
- 18 『文集』 2 卷p617
- 19 「論“山菓蛋派”」（高捷『山西大学学报』1984年第3期）、「略談“山菓蛋派”的理論主張
和創作實踐——与戴光宗同志商確」（程繼田『山西文学』1982年11期）、「“山菓蛋派” 小説
創作的“戲劇化” 傾向」（朱曉進『南京師範大学報』（社会科学版）1995年第1期）
- 20 注5に同じ。
- 21 『文集』 3 卷p1045
- 22 『文集』 3 卷p1050
- 23 『文集』 3 卷p1053
- 24 同上
- 25 『文集』 3 卷p1055
- 26 『文集』 3 卷p1058
- 27 『文集』 3 卷p1059
- 28 同上
- 29 『文集』 3 卷p1069
- 30 『文集』 3 卷p1105
- 31 『文集』 3 卷p1112
- 32 『文集』 3 卷p1127

- 33 『文集』 3 卷p1132
- 34 『文集』 3 卷p1216
- 35 『文集』 3 卷p1231
- 36 注5に同じ。
- 37 胡正の作品における心理描写の多用については、先行研究「胡正小説創作的芸術特色」(楊占平, 王秋君, 王世杰, 陳玉璽, 蘇春生『山西師院学報』1981年3号), 「胡正論」(楊品, 王君『批評家』1986年2月)にも指摘がある。但し心理描写の多用が50年代にはじまる、という言及自体は本稿以前にはない。
- 38 注19に同じ。
- 39 拙稿「趙樹理文学における故事性」(『島大言語文化』13号2002年), 「趙樹理文学の変容」(『島大言語文化』15号2003年)を参照いただきたい。
- 40 注9に同じ。
- 41 「昨天的足跡」(胡正1991年10月『五人集』所載)
- 42 注41に同じ。
- 43 胡正は北京文学研究院在学中、この作品を愛読したという(「昨天的足跡」)。
- 44 注5に同じ。

作品名	語り手	描写・叙述	時間構造	物 語	執筆時期
碑	物語世界内の語り手、但し「我们的组织」のように殆ど登場しない	情景描写1・人物描写1	直線的、クロノスの時間構造	共産党幹部の英雄的行動を描く、【問題⇒解決】構造は無い。	1942年8月
民兵夏收	物語世界外の語り手、顕在	情景描写6	直線的、クロノスの時間構造	4章構造、民兵部隊の活躍の一幕を描く。情景描写が多く叙情的。【問題⇒解決】構造は無い。	1943年8月
抗日村长	物語世界内の語り手、但し殆ど登場しない	情景描写1	冒頭に主人公のプロフ、その後は直線的、クロノスの時間構造	4章構造、村长李連仲の活躍を描く。【問題⇒解決】構造は無い。	1946年1月
梨树冤 — 郭妈妈诉苦记—	物語世界内の語り手「我」	叙述中心	語り手の回想、直線的	「私」が語る「私」自身の2年前から現在に至る物語、閻錫山支配下での苦難⇒共産党政権下での翻身という【問題⇒解決】構造あり。	1946年7月
捞饭盆	物語世界外の語り手	人物描写1	過去の回想が挿入されるが基本的には直線的時間構造	【問題⇒解決】構造、折角開墾した河川敷の土地を地主に奪われる⇒共産党の指導下で闘争を経て取り戻す	1946年8月
长烟袋	物語世界外の語り手	叙述中心	前半に過去の回想が挿入されるが、基本的には直線的、クロノスの時間構造	7章構造【問題⇒解決】構造、土地契約書や食料をしまいで逃げようとする吝嗇な地主を、皆で追い詰め、逐還させる。	1947年2月
六颗熟鸡蛋	物語世界外の語り手	心理描写2	直線的、クロノスの時間構造	3章構造、4p程度の短編。【問題⇒解決】構造は無い。老夫婦が兵士たちに種まきを手伝ってもらったお礼をしようとする一幕を描く。	1947年7月

作品名	語り手	描写・叙述	時間構造	物語	執筆時期
报信	物語世界内の語り手 「我們」 顕在	叙述中心	物語の半ばで時間が遡り、その中でさらに過去の回想が挿入される。	【問題⇒解決】構造は無い、雪の中日本軍の奇襲を知らせて行った男が描かれる。	1950年6月
永真回来了	物語世界内の語り手 「我」が王双発から聞いた物語を語る、王の語る物語は「我」によって物語世界の外から語られる。	人物描写2 心理描写1 情景描写1 絵画的リアリズム	冒頭（恐らく1950）> 【王双発の語り】1945～1947～解放後という回想スタイル。回想部分にも時間の錯綜がある。	「我」が王双発から聞いた物語の中に【問題⇒解決】構造が存在する	1950年11月
武子发与吴农荫	物語世界外の語り手	心理描写1 1	冒頭と後半に人物の経歴・キャラクターを語る部分で時間が錯綜するが基本直線的	【問題⇒解決】構造	1950年12月
除害	物語世界外の語り手	人物描写、心理描写 5 情景描写1	過去の回想や登場人物の来歴、因縁などが数回挿入される	8章構造、謎解き（牛殺しと仲たがいの画策の犯人探し）と【問題⇒解決】構造（地主の打倒と2人の和解）	1951年7月
鸡鸣山	物語世界外の語り手、顕在	【中篇小说】随所に心理描写・情景描写の多くは語り手の顕在と区別がつきにくい	前半に登場人物の来歴、回想などが挿入されるが本能的には直線的な時間構造	大筋は分隊の活躍を描く。囚われた朝鮮人少年の救出という【問題⇒解決】構造もあるにはある。	1953年2月
摘南瓜	物語世界外の語り手、1章で幾度も顕在する。	心理描写5	前半に登場人物と事物の来歴、あとは直線的な時間構造	3章構造、【問題⇒解決】構造、但し自力での解決。	1954年2月

嫩苗	物語世界外の語り手	心理描写4 情景描写1 1 心理描写は回想と混在し、長い。また独白に近くなる。	前半に主人公の紹介・主人公の回想が挿入され、その後は直線的な時間構造	4 章構造、【問題⇒解決】構造；新技術とそれを認めない人々の対立⇒解決の物語	1954年 8 月
两个巧媳妇	物語世界外の語り手、但し頻繁に顕在し、「你」に対して語りかけるスタイル。	心理描写11情景描写3 人物描写2；主人公2人の描写は問題解決の直前に置かれる	直線的、クロノスの時間構造、3 章で「今年の春」という言葉がある。	5 章構造、【問題⇒解決】構造；村の2人の嫁の紹介⇒仲たがい⇒仲直り	1955年 1 月
七月古庙会	物語世界外の語り手、顕在多い。	心理描写6	後半一度「実はこうだった」種明かしがあるが基本的には直線的な時間構造	7 章構造、【問題⇒解決】構造だが解決部分がやや曖昧に描かれる。また、「問題」が党の幹部自身の誤った考えと設定されている	1955年 2 月
一夜之間	物語世界外の語り手、主人公葛運昌に焦点化した語り。冒頭で僅かに顕在する。	心理描写10 回想と心理描写が混在しており、主人公葛運昌の心理描写に重点が置かれる	作中に幾度か主人公葛運昌の回想が挿入される。	6 章構造、【問題⇒解決】構造。但し問題は主人公葛運昌自身の思想	1956年 5 月
到女家去的路上	物語世界外の語り手、顕在。	心理描写9うち語り手顕在と区別が付けにくいものが多い、妻の心理の変化が追われている	前半2 章までに過去の来歴が挿入され、後半は直線的に解決まで展開する。	4 章構造、【問題⇒解決】構造；嫁を嫁がせた金と引き換えに買ったロバを高級社に供出することに対する葛藤＝「問題」・よその高級社の人々からの賞賛 & 自問自答による自己解決＝「解決」	1956年10月

作品名	語り手	描写・叙述	時間構造	物 語	執筆時期
盲女乔玉梅	物語世界内の語り手 「我」が語る 物語＞喬士光【我】が語る 彼自身の物語＞喬が伝え聞いた彼の妹弟の物語、顕在。	心理描写2 語り手「我」の心理のみ	語り手「我」が喬士光と出会う妹の治療をする物語＞喬士光自身の物語＞喬が伝え聞いた妹と弟たちの物語と 言う形で入れ子型に内包されている。	【問題→解決】 構造存在せず。	1957年5月
拉驴记	物語世界外の語り手	心理描写6、情景描写1	前半に主人公の回想(問題)が挿入され、その後は直線的に物語が展開する	【問題→解決】 構造	1958年6月
余牛子妻余粮	物語世界外の語り手	心理描写1	前半に回想(問題のあたりか)が挿入され、後は直線的に結末まで進む	【問題→解決】 構造	1958年8月1日
奇婚记	物語世界外の語り手、顕在多し	心理描写10人物描写2、心理描写は語り手の顕在と区別が付けにくいものがある	前半に問題の所在が語られ、後半クライマックスで「実はこうだった」種明かしがされる。	【問題→解決】 構造；文化大革命期の公社書記による迫害&離婚の強制＝問題＞文革の終焉&人々の善意による大団円＝解決	1979年7月

<p>几度元宵</p>	<p>物語世界外の語り手、頭在し、論評を加えもする。</p>	<p>【中篇小説】心理描写・情景描写が随所に挿入される、特に主人公2人の心理が詳細に描かれる</p>	<p>上篇は1975年の元宵節前後の物語 > 1936年1942年1957年1965年1966年1967年1970年など節目となる元宵節の物語の回想が複雑に絡み合い内包される。下篇は1979年の元宵節前後の物語 > 1975年1976年の物語の回想が内包される。</p>	<p>13章構造。上篇・下篇共に【問題⇒解決】構造を持つ。上篇は【恋の始まり⇒障害⇒党幹部の助力による解決】と言う山薬蛋派的物語構造。下篇【名譽回復⇒妨害⇒党幹部による解決】【盗まれた業績⇒妨害⇒党幹部による解決】という複雑化しつつも山薬蛋派的構造を持つ。ただ冒頭においては問題点は提示されず、回想の形で徐々に提示される。</p>	<p>上篇 1981年10月 下篇 1982年5月</p>
<p>遭遇</p>	<p>物語世界外の語り手</p>	<p>心理描写9、情景描写4</p>	<p>冒頭から最後まで幾度も回想や登場人物の来歴、過去の来歴が挿入される</p>	<p>7章構造、【問題⇒解決】構造なし。2人の恋の芽生えが描かれる。冒頭は戦闘シーンの描写で何時のことか明かされるのは2章になってから。</p>	<p>1987年5月</p>
<p>重陽風雨</p>	<p>物語世界外の語り手</p>	<p>【中篇小説】心理描写、情景描写が随所に挿入される</p>	<p>1948年から始まる物語の随所に「1946年解放区での2人の恋」を中心に過去の物語や回想が挿入される。時間の錯綜が激しい</p>	<p>【謎解き】：何故何奇堂は解放区を追われたのか。【問題⇒解決】構造は不完全。彼女のもとに向かう紀明の姿が描かれて物語は終わる。冒頭における設定などは存在せず、徐々に回想などを通じて謎解きがなされる。</p>	<p>1992年3月</p>
<p>那是一只灰猫</p>	<p>物語世界外の語り手</p>	<p>情景描写2 心理描写2</p>	<p>直線的、クロノスの時間構造</p>	<p>【問題⇒解決】構造は存在せず、問題のみ提示される。冒頭における設定など、情報の提供がされない。</p>	<p>1997年4月</p>